

HEAVEN
AND EARTH
ARE BUT ONE
AND THE BUTTERFLY
FLYING TO THE WORLD

森英恵

世界にはばたく蝶

MADAME BUTTERFLY,
FLYING TO THE WORLD

ご挨拶

このたび、水戸芸術館開館30周年記念事業として、「森英恵 世界にはばたく蝶」を開催します。

森英恵は、戦後の復興期にファッションデザイナーとして走り出し、東西の文化を融合させながら世界にはばたく力強い女性として活躍してきた日本ファッション界のパイオニアです。1965年にニューヨークで初の海外ショー、1977年には東洋人で初めてパリ・オートクチュール組合の会員となり、世界的なファッションデザイナーとしてその名を知られるようになりました。時代とともに第一線を駆け抜けてきた姿は、世界で活躍する女性を象徴する憧れの存在として人々に愛され続けてきました。本展では、森が半世紀に渡り手がけてきたオートクチュールや映画、舞台の衣裳、ユニフォームなど、多岐にわたる仕事を通し、激動の時代をしなやかに切り拓いてきた彼女の足跡を紹介します。

本展の開催にあたりご支援ご協力賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2020年2月 水戸芸術館

シンフォニーの作曲家・森英恵

吉田秀和（音楽評論家／水戸芸術館初代館長）

*「HANAE MORI STYLE」 講談社インターナショナル刊（2001年7月発行）より



森英恵

1951年スタジオを設立。日本映画全盛期に数多くの衣裳デザインを担当する。1965年ニューヨークで初の海外コレクションを発表、「EAST MEETS WEST」と絶賛される。1977年パリにメゾンをオープンし、パリ・オートクチュール組合に属する唯一の東洋人として国際的な活動を展開。日本ファッション界の草分け的な存在となり、国境を越えた「美の大使」と高く評価されている。現在は衣裳展の開催や若手の育成など、「手で創る」をテーマに活動。「朝日賞」「紫綬褒章」「文化勲章」「レジオン・ドヌール勲章オフィシエ」他、受賞多数。

森英恵さんは蝶が好きだという。水戸芸術館で展示会を開催した時も、一室を彼女の蝶のコレクションにあてたが見事なものだった。

彼女の蝶好みは単なるホビーではなく、蝶はその二枚の翼で西洋と東洋という別々のものであって、しかも一対となった時初めて完全になるものの象徴でもあり、これこそ彼女の制作の本質に通じるものだという話をきいた覚えもある。しかし、この美しい喩えは森さんだけでなく、近代日本の芸術家の仕事の全体に通じるものがあり、西洋の芸術の提出したものにどう対決するかは、近代日本の芸術創造にとって避けて通れない課題だった。

その中で、森さんのお仕事は、西洋の骨組を自分の身につけながら、そこに東洋——といっても日本が主だが——の色と形を意匠化して服飾するという道筋をとるものだったように見える。これは私の身近かの明治以来の音楽家たちの仕事にもみられることで、その中で森さんの制作は、少数の通人に珍重される実験的尖端芸術を志向するというのではなく、スケールの大きな交響音楽を描くようなものだというように、私には思われる。彼女の衣裳は多くの人が目見た途端にパッと引きつけられるようなスター的華やかさと、人々の心をゆすぶるような行動的積極的働きかけをもった作品になっている。それでいて、また、本当に目の肥えた人（音楽でいえば、耳の良いきき手）、あるいは専門家にもなるほどと思わせる新しいものに挑戦してゆく実験精神と、それを形に仕立てる技術の確かさの裏づけがある。そういう点で、彼女は音楽でいえば、シンフォニー作曲家と呼ぶことのできるタイプと思われる。この両面があるので、森さんはオート・クチュールだけでなく、プレタ・ポルテの実用芸術の

畑でも仕事ができる人なのだろう。それは大衆向けを狙うというより、自然と大衆性に通じてゆく、たとえば行動性に富む服装のアイデアにも富んだ素質ということになるのではなかろうか。ベートーヴェンやマーラーは大勢のきき手をひきつけるからといって大衆の人とはいえないのである。

美術家としての森さんを、私が、初めて知ったのはオペラの衣裳担当者としてだった。最初はミラノのスカラ座で浅利慶太さんが演出した『蝶々夫人』の時だが、そのあと一九九七年のザルツブルグのフェスティヴァルでの『エレクトラ』で彼女が受けもった衣裳。これが素晴らしかった。浅利さんの演出も変っていて、彼はこの劇が普通ドイツ表現派の伝統によって、全体として暗く陰鬱な舞台の中で、筋の節々に真紅の烽火の炎が燃え上がったり、真赤な血があたり一面にとびちるといった形になるのに背を向け、底の抜けるほど真青な地中海にとりまかれ、そこに浮ぶ孤島のさんさんたる陽に照らされ、きらざらした熱と光の中で起る肉親相喰む悲劇として構想した。劇中の人物は、強烈な光と色の交代する古代風風景の中で動きまわり、苦しみ、死ぬ。

主な登場人物は母と娘とその妹の三人の女たち。森さんはその三人に紫、黒、青の衣裳を配分した。そうして黒と青が相寄り嘆いたり争ったりするあと、母の王妃が登場する段になって、森さんはそれを、濃いリラ紫の長い長いヴェールの被衣の裳裾をひるがえして、何かをつきやぶるようにして突如として一人の形姿が立ち現われる場としてつくった。それは満場の客がみんな言葉を失い、思わず息をのむ瞬間、まさに呪縛の瞬間だった。豪奢と淫美、気品と

おごりが一体となった姿。それをみて、私は森さんの何者かであるかを認識したのだった。森さんの仕事を西洋の構造に日本の装飾を加えたものというだけでは何を言ったことにもならない。森さんはそこに「行動性」という裏づけを与えた。彼女のは「踊る色彩」「躍動する形象」というべきものなのだ。一般に日本の美術家芸術家は静止と寡黙の中で深いものを表わそうとする。茶の湯にしろ、武満徹の多くの作品にしろ、その底には沈黙の重み、休止の尊さがある。森さんにもそれがある。けれども彼女の独創はそこにも「動き」を入れる。たとえば、彼女の衣裳ではキモノの裾模様が果たす役割も小さくない。西洋にだって服の下部に飾がないわけではない。ベラスケスの王女の肖像の巨大なスカート、ナポレオン三世時代の筒形のスカート……すべては服装全体のバランスの移動とかかわり、構造的変化をひきおこす。日本の裾模様は着物の形には手をつけない。

着物は静かに正座した姿が美しいが、動く時はできるだけゆるやかに目立たぬよう重心を移し位置を変える。それに着物でも、もともと上半身は飾りを避け清楚な姿を心がけている。それだけに立ち上がると、着物の下半身に大きくおかれた裾模様はひととき鮮やかに人目をひく。森さんはこれを見逃さなかった。静止の美を廃しはしないが、ある瞬間突如として破調の美を出現さす。私はそこに舟の帆のように二枚の羽根を重ねて憩っていた蝶が音もなく突然飛び立った時の軽快と優雅と活発な生命力の一体化をみる。

小澤征爾（指揮者／水戸芸術館館長）

*「HANAE MORI 1960-1989」朝日新聞社刊（1989年9月発行）より

森さんは日本ファッション界のパイオニア。東洋人として西洋の文化に取り組み、海外に出て市民権を獲得し、さらに熾烈な競争の世界で勝負を続けるようになるまでには、大変な苦勞があったに違いない。今でこそ、経済大国と言われ、日本人に対する評価が高まり、新たな認識をされるようになったが、十数年前まではとても偏見が強かった。「小さい頃から洋服を着ていたのか」「バッハを知っていたのか」などとよく聞かれたものだ。明治以降、西洋文明を受け入れてきた僕らにとっては自然なことであるのに、西洋人には理解しがたいこととして映ったらしい。そんな中、森さんのようなパイオニアが命をかけるほどの真剣さで取り組んできたからこそ、多くの日本人デザイナーがパリで活躍する時代を迎えることができたのだと思う。僕は森さんから苦勞話を聞いたことがない。やろうと決心したことは貫くし、頭も切れるし気も強い。海外に出ても対等に勝負できる人間としての素質や才能を始めから持っていたのだと思う。海外で眺めていると、森さんの根をおろした活躍ぶりがよくわかる。

吉井澄雄（照明家／水戸芸術館演劇部門顧問）

*「HANAE MORI 1960-1989」朝日新聞社刊（1989年9月発行）より

1976年に、森英恵さんのショーの照明を担当させていただいて、私は初めて、着るもののデザインに目をひられた。この機会がなかったら、貧乏な演劇青年だった私には、ファッションとかモードという言葉は、奇抜、贅沢、非実用などと、終生、同意語でありつづけたろう。ところが、ハナエ・モリのデザインの世界は、演劇から出発し、オペラを目指したその同じ道筋にあったのである。以後、ミラノのスカラ座で浅利演出の『蝶々夫人』、パリのオペラ座でヌレエフ振付の『シンデレラ』など、国内外で多くの仕事を御一緒させていただいた。

いつでも、どこでも、森英恵さんは原宿でお目にかかるのと同じように、にこやかに、優雅に、ふるまっていらっしゃる。そのお姿と仕事に、インターナショナルという言葉を実感し、世界のトップでありつづけることの偉大さと大変さを同時に思うのだ。

水戸芸術館開館30周年記念事業

森英恵 世界にはばたく蝶

Madame Butterfly, Flying to the World

2020年2月22日(土)→5月6日(水・振)

水戸芸術館現代美術ギャラリー

主催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

協賛：株式会社アダストリア、医療法人真成会たきもとクリニック

協力：森英恵事務所、株式会社ハナエモリ・アソシエイツ、株式会社インファス・ドットコム、

四季株式会社、日活株式会社、松竹株式会社、NHK、株式会社息吹工藝社、

株式会社アバクス、サントリーホールディングス株式会社

企画：水戸芸術館

企画協力：島根県立石見美術館、株式会社Studio仕組

展覧会担当：山峰潤也、井関悠[補佐] (水戸芸術館)

企画協力：廣田理沙(島根県立石見美術館)、河内晋平(株式会社Studio仕組)、

小野崎理香(株式会社Studio仕組)

展示監修：森英恵事務所

広報宣伝物デザイン／展覧会会場サイン：大岡寛典事務所+伊藤里織

衣裳展示協力：四季株式会社、佐野利江

照明演出：佐野清一(水戸芸術館)、合同会社マッシュシステムズ

プロジェクション・マッピング：齋藤達也(演出)、福田泰崇[dep](CG)、

LADER production(音楽)

展示什器製作：株式会社息吹工藝社

映像同期システム：時里充

展示担当：廣川隆史(水戸芸術館)

展覧会アシスタント：小泉英理(水戸芸術館)

教育普及：森山純子、佐藤麻衣子(水戸芸術館)

広報：鳥居加織、川崎麻里子(水戸芸術館)